

我が心は、機械にあらず

遠い昔、ある王国で、  
貿易に成功した商人が、その褒美として、  
王様から、不思議なハサミを授けられました。

それは、極めて切れ味の良いハサミであり、  
軽く触れるだけで、まるで紙を切るように  
何でも簡単に切れるハサミでした。

そのハサミが、あまりに切れ味が良いので、  
その商人は、身の回りにあるものを  
何でもハサミで切り続けていたところ、  
恐ろしいことに、いつのまにか、  
目に付くすべてのものが、  
紙に見えるようになってしまったのです。

遠い彼方の国の、この不思議な物語は、  
現代の我々にも、大切なことを教えてくれます。

便利な機械を生み出し続ける科学技術。

それが、あまりにも切れ味の良い道具であるため、  
我々は、いつのまにか、目に付くすべてのものが、  
機械であると思うようになってしまったのでしょうか。

いま、世の中に溢れる

「人を動かす技術」や「感動させる技術」といった言葉。  
そして、「感性工学」や「魅力工学」といった言葉。

それは、人の心までも「技術」によって自由に操作し、  
感動や魅力までも「工学」によって生み出すことができるとの  
我々の無意識の思い込みなののでしょうか。

我が心は、機械にあらず。

風に乗って、遠くから、その声が聞こえてきます。